



# RIKKYO SECOND STAGE

## Contents

- P1 「変化」の時代に志を持つRSSC  
 P2 清里清泉寮合同ゼミ合宿 P3 清里合宿の思い出  
 P4 夏季集中講義特集 P5 修了生・在校生の社会活動  
 P6 講演会の紹介 P7 RSSCサポートセンター活動紹介  
 P8 サポートセンター・同窓会活動など

立教セカンドステージ大学(RSSC)は、立教大学が提供する生涯学習の場です。RSSCは、RIKKYO SECOND STAGE COLLEGEの略称です。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」  
 編集責任：笠原清志 編集長：中村昌子  
 発行日：2013年1月15日  
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



## 「変化」の時代に志を持つRSSC

立教セカンドステージ大学教員  
古賀 義弘



「学び直し」と「再チャレンジ」を高く掲げて発足した立教セカンドステージ大学は早くも5年の歳月を重ね、またニューズレターも10号が発刊されました。一つの節目を迎えることが出来たのは、何よりも受講生の皆さんと大学・教職員が文字通り一致団結した結果ではないかと考えます。殊に受講生の皆さんの学問への真摯な姿勢と、積極的で多様な相互交流がこの原動力であることは明白です。

戦後日本はもう少しで齢70です。論語に曰く「七十にして心に欲する所に従えども、矩(のり)を超えず」とあります。しかし現実を見ると、あちこちで不透明感・不安定感いっぱいの社会になってしまい、論語の文言のようにはいきません。どのような形か、どのような方法では、どのようにしてか、は横に置くとしても「変化」が必要、かつ求められていることは事実です。

私たち自身はどうでしょうか。RSSCの皆さんは紛れもなく「変化」の年代にあります。これまで築いてきた企業でのポジション、作りあげてきた家庭から新たな段階へ、つまりセカンドステージでの人生を歩み始めています。いわゆる「会社人間」として時には家庭を顧みない暇もない程に精力的に働き、また労苦の多い子育てから、今や新しい人生をどのように送るかを改めて真剣に考えなければならない岐路にさしかかっています。これまでの歩き方から大きく舵を切り、一人の人間として、また個人としてどのように生きるのかが求められています。

趣味を見つけることも良いでしょう。社会的な活動への参加も素晴らしいことです。様々な要因で青年時代に学ぶことが出来なかったことに挑戦することも大切なことです。

私は、自ら「変化」することを目的意識的に取り組むこと、それがRSSCで学ぶことであると思っています。

「新しい酒は新しい革袋に入れる」と言いますが、自分自身が新しく「変化」するには新しく学問に接すること、論じ合える仲間がいることが不可欠です。それは固定観念や既成の概念から自分を一度解放する必要があるからです。

言うまでもなく学問は日々進化しています。私たちが過去に学んだ学問は、その後の研究で更に豊かになっていますし、ある事象の中では否定されてしまっていることもあります。新しい見方や考え方を学問に接して再構築することが必要です。その意味でRSSCは格好の「学び直し」の機関です。

また受講生の皆さんは、豊富な人生の経験者です。そして当然のことながら多種多様な経歴を持ち、何よりも将来に向けて積極的な姿勢で歩こうと考えている人たちです。このような人たちが、それぞれの人生を尊重して自由闊達に切磋琢磨することは、何と素晴らしいことではありませんか。そこには「志」を持った歩き方が見えてきます。

RSSCでは「学び直し」と「再チャレンジ」を仲間と論議・交流することから、新たな「変化」の道筋の幾分か必ず見えてくるものと確信しています。

(立教セカンドステージ大学運営委員)

DO YOUR BEST,  
AND IT MUST BE FIRST CLASS

夏休みも終わりに近づいた9月7日（金）から9月9日（日）の日程で、RSSCの合同ゼミ合宿が、山梨県清里にある「清泉寮」で行なわれ、今年は、本科生65名、教員7名が参加しました。

いろいろ盛りだくさんの企画で参加者が交流を深めました。そして、空気や水、とりたて野菜のおいしさに感動し、人間の生きる原点である自然との触れ合いの大切さを思い出させてくれた3日間でした。



### ビデオ鑑賞

「ポール・ラッシュ博士の生涯」のアニメビデオを鑑賞し、戦後の清里復興に半生を捧げた博士の熱い心に感銘を受けました。

### 千石先生講演

「絵を読むこと」というテーマで講演されました。「自画像は個の自覚と心理的な自己暗示にかかわる」というお話は難解ではありましたが、千石先生の真摯な研究姿勢を感じさせてくれました。

### 懇親会

清泉寮に到着した夜、全員が集まって懇親会が催されました。素敵な司会者が登場して、夜の更けるのを忘れて楽しい時間を過ごしました。



### 自然保護観察

清泉寮周辺には素晴らしい自然の姿があります。レンジャーと一緒にブナの木が生い茂る自然遊歩道に入り、見知らぬ植物や、ヤマネの巣などを観察しました。

### 聖アンデレ教会見学



ポール・ラッシュ博士と地元の人たちが手作りで造った教会の歴史を、韓国での浅川巧の活動を例に引きながら、武藤チャプレンに語っていただきました。

### オプションイベント

全員が4つのコースに分かれました。

「野辺山周辺バスツアー」は、野辺山天文台、南牧村文化交流館、しし岩などを見学。

「清里スローウォーキング」は、スニーカーを履いて1万歩（5キロ）のコース。

「清里周辺バス移動散策」は、美し森、東沢大橋、まきば公園などで風景を満喫。

フリープランは、渡辺ゼミの7人と、武藤チャプレン、渡辺先生、笠原先生、古賀先生、庄司先生と共に、「浅川巧記念館」と「くんぺい童話館」を訪問しました。



### キャンプファイヤー

星空観察会は、残念なことに雲が厚く垂れこめていたので、屋内での説明になりました。その後、お待ちかねのキャンプファイヤーが始まりました。組み木に火が入ると先生方も参加して、フォークダンスの輪が広がります。青春時代の歌が始まるとキャンプファイヤーは最高



潮！ 楽しいひと時でした。終了後は、いろいろなグループに分かれて、遅い時間まで交流の場がもたれました。

### ポール・ラッシュ記念センター見学

戦後日本の開拓農業や地元の人たちの生活の資料、アメリカンフットボール生みの親でもあるポール・ラッシュ博士の遺品などが展示されています。（タイトル写真はポール・ラッシュ博士の座右の銘です）



## 清里合宿の思い出

### ☆思いのほか楽しかったフォークダンス 小平陽一 (本科)

合宿前は、えっ！この歳でフォークダンス？と正直困惑した。友人に話したら笑われた。ゼミでも、「知らない男の人と手をつなぐのはねえ？」の声が聞こえてきた。前夜、女性陣主導のもと練習が行われた。が、どうも照れくさくてノレなかった。その後、何とか逃れられないものと男組の風呂談義。盆踊りの方がよかったな、ともつぶやいた。二日目夜、いよいよキャンプファイヤーが始まった。そして

曲が流れ出す。もうやるしかない。一曲目を見よう見まねでやった。ぎごちなかったが案外いけた。二曲目からはもう完璧！相手の顔も見えて、挨拶を交わしながら楽しんだ。三、四曲と全部参加した。歳のせいでは息が上がったが、昔青春のいい汗かいた。



### ☆清里合宿の一コマ 櫻井すず子 (本科)

清里の一番の思い出は、キャンプファイヤーの実施を巡るゼミ長さんたちの新館ロビーでの会議です。キャンプファイヤー当日の天気予報では実施が危ぶまれ、初日に実施した方がよい状況でした。会議の最中に気象庁のサイトの点検や、当日実施する場合の打ち合わせ、途中で雨の場合などの状況設定であらゆることを想定しての最後の打ち合わせでした。後は神に祈るばかり(天気予報はずれて…)。当日は星も見える空になり祈りが通じました(神さまありがとう)。ゼミ長さんたちの情熱は雨雲を近づけませんでした。キャンプファイヤーの灯りと温かさ、薄明りの中のフォークダンス、ダンスの時の友の手の暖かさ、どれも心に残る一コマです。



### ☆清里は感動がいっぱい 藤原武彦 (本科)

各ゼミ長の企画の素晴らしさと前向きな女性有志の協力は傍で見ていると感激です。

キャンプファイヤーでの女神の松明姿は凛としてかつ堂々とした勇姿、衣装は古いシャツ再利用、冠は200円とのこと、やはり女性は偉いと再認識。

暗闇のフォークダンス、照れくささがある私に振付の小父さんからのご指名、二周までは震え足は動かさず相手の足を踏んだかも、ご免なさい、三周目で昔の振りを思い出す、握った手の感触に中一時代のあの娘のことが頭をよぎった。思い出させてもらって有難う。子供じみた食事時のダッシュ、相部屋の方との四方山話などで親近感UPを実感できた合宿でした。



### ☆涼やかな夏の思い出 筒井久美子 (本科)

合宿を通して、そこには、少年少女の眼差しをした仲間がいっぱい。普段、アカデミックな先生たちもピュアな素敵な笑顔で、グッ！と身近な存在になりました。

また、キャンプファイヤーの舞台裏は、終始、気合いの入ったチームプレーでした。当夜は心配された雨も降らず、漆黒の闇からトーチを持った女神の登場から最後まで大成功!! 仲間たちのチームワークと創意工夫の賜物といえるでしょう!

セカンドステージ大学では、どんな場面でも一生懸命に学び、演じ、楽しむという姿勢が貫かれています。清里合宿も、素敵な仲間と一緒に過ごした大切な夏の思い出の一コマとなりました。



### ☆清里合宿を振り返って 栗田 彰 (専攻科)

期待以上に有意義で楽しかった1年目の清里合宿。合宿前はゼミ生同士の交流が中心であったが、合宿を機に緊張感もほぐれ交流の輪も一気に広がった。学究肌の人、語学や楽器が堪能な人、歌・踊り何でもござれの人など4期生が様々な才能の持ち主であることを知る。講演会、自然観察会、お楽しみの懇親会、フォークダンスと連日盛りだくさんのプログラム。部屋での交流は深夜まで続いた。

今年も厳しい暑さが続く9月6日36名が参加し清里へ。出発から車中はすっかり打ち解けた雰囲気。平山郁夫美術館、白州蒸留所、山梨県立美術館と見どころ満載のスケジュールであったが、互いの絆を一層深めた合宿となった。4期生の「飽くなき探求心」と「強靱なスタミナ」は今年も健在である。



### ☆清里合宿5つのキーワード 教員 坪野谷雅之



私は清里合宿に08年度から全5回参加しました。今回の写真を眺めながらその想いを「合宿の楽しみ」「自然の癒し」「豊富な体験学習」「学友の絆」「学びの情熱」の5つのキーワードにまとめました。ゼミ長が楽しい綿密な計画を練り上げ、新しい通学と学びの疲れから解放され、清里の清々しい空気と自然に触れて武藤チャプレンの祈りに癒され、壮大な清里教育実験計画(キープ協会)に生涯を捧げたポール・ラッシュ博士物語に涙し、ゼミや委員会活動の枠を超えて夜遅くまで語り合い、そして、鋭気を養い、学友を得て、後期の授業とキャンパスライフにと心は弾みます。この楽しく有意義な合宿が毎年続くことを心から祈念します。(立教セカンドステージ大学運営委員)

「環境保全とコミュニティ形成」

永石文明先生

この講義は、里山や河川のフィールドワーク（以下、F.W.）を通し、生態学や環境社会学的な考え方や視点を身につけるのが目標です。初日の「里山とコミュニティ」



F.W.は、小手指駅に集合。鎮守の森では、宮司さんを中心に大勢の方が草刈りなど里山保全活動に励んでいました。無農薬のためかイナゴが元気に飛び跳ねている八幡たんぼ（古代米や大賀ハスを栽培）を見学した後、野山を上り下りして、地区の自然環境保護の前線基地兼資料館「さいたま緑の森博物館」に到着。森の樹々に包まれて食べた“おにぎり”は格別でした。二日目の「河川とコミュニティ」

は、東久留米駅に集合。落合川（新河岸川支川）で楽しそうに遊ぶ親子、川に飛び込む小中学生や悠然と泳ぐ鯉に改めて川の持つコミュニティ創造力に驚かされました。この地区は湧水も点在しています。冷たい湧水は、猛暑の中を歩く私たちには最高の自然からの贈物でした。三日目は、午前中はコモンズなどの講義を受け、午後は各グループがF.W.で得た知見をもとに、K・J法によるプレゼンテーションをしました。良好な環境が、自治体、企業、大学、多くの市民やNPOの協力とパートナーシップに支えられていることを学んだ3日間でした。（Y）

「セカンドステージと健康長寿」

米井嘉一先生

セカンドステージに入った私たちにとって、やはり一番の関心事が健康長寿であると言えるかもしれません。ところが、根拠がわからないままに、テレビなどで伝えられる健康情報に振り回されていることがあります。

しかし、抗加齢医学（アンチエイジング）を日本に紹介され、研究していらっしゃる米井先生のお話は、その理論を、私たちにもわかりやすく解説して下さったものでした。人生を春夏秋冬にたとえ、その老いまでのプロセスをできるだけ遅くするのが抗加齢医学。3日間、とても熱心に講義して下さった米井先生ご自身が、そのお手本そのものです。

生き生きした、健康的な状態を保つ健康長寿への道のりは、まず、自分の弱点を知ること。そして、その弱点を運動、食事、精神療法により重点的に克服し調和させることだということ。バランスのとれた食事、適度な運動、前向きな思考の大切さが、裏付けを持ったものとして、理解できました。授業の最後には、全員、感想と自分の目標を発表しましたが、講義の内容を知ったら、受講しなかった人は残念がるのではないかという声が出るほどでした。（M）



RSSCでは、夏季に連続3日間の集中講義が行われます。その4講義を受講生の目から紹介します。

「セカンドステージの住まいづくり」

甲斐徹郎先生

暑さ真っ盛りの中、行われた夏季集中講義。一日目には、その暑さの正体をさぐる体感実験を行いました。立教大学キャンパス内をグループごとに計測器を持ち、あちこち測定しました。当日の気温は32度。しかし、銀杏の大木の下や風の通り抜ける通路など、同じ気温でも心地よく感じられる場所もあることを発見。体が感じる温度と実際の温度が違うこと、その鍵は表面温度にあるということを実感しました。

そこから、クーラーのいらぬ住まいのしくみ、緑のカーテンの役割を、先生が実際に手がけられた「櫻ハウス」「熊谷の家」などの住宅の映像で見えていきました。さらに、緑の連なりが心地よさを生み、自然なコミュニティが生まれていく住まいの形について、実例を比べながら意見交換していきました。



「ライフスタイルのデザイン」のベースが「住まいのデザイン」であり、そのためのベースとなる考え方が、「関係」のデザインであると、まさに、個人の生き方、環境、コミュニティとの関係を問い直すダイナミックな広がりのある講義でした。甲斐先生の熱意あふれる問いかけに、受講生も揺さぶられ、教室が熱い討論の場となった三日間でした。（S）

「愛と癒しのコミュニオン」

鈴木秀子先生

三日間の講義内容の多くは、自分と向き合うこと、ロールプレイやグループワークに費やされた。それらを通し、自分の中にある生きる力への気づき、他人との信頼関係を築く力の学び方を体験することができた。以下、講義内容のいくつかを列挙してみよう。

「今、一番ほしいものとその理由」「表現：5・6・7歳頃の楽しかったこと」「表現：一番悲しいこと、それをどう乗り越えたか」「表現：これからの生き方」「話すことは、聞く力が9割を占め、目の前の人を大切な人と決めることによって立つ」「意図して共鳴・共振するところに幸せがある」「自分と相手の価値観をいかにリンクさせるか」「主体性と目標を持つこと、優先順位を決めること」



受講後、先生や仲間からのコメントを記録した。それほど、これから生きる上で大切にしたいと思えたからだ。先生のしなやかなそよぎに身をゆだねた受講生一人ひとりに、「愛による魂の絆を意味するコミュニオン」の思想がこだましあった三日間であった。（T）

## 修了生・在校生の社会活動

立教セカンドステージ大学（RSSC）は開校5年目を迎え、修了生・在校生は様々な社会活動をしています。その近況の一端を紹介します。

### 菊地 俊明さん（第1期生2008年度本科修了）

#### 「ポストドク支援」

RSSCのスタートから半年程経った頃、K大学で「ポストドク(PD)が産業界で活躍するための支援プログラム」に携わることになりました。アカデミアの世界しか知らないPDに、企業での長期インターンシップの機会を提供し、同時に社会人として必要な知識を習得してもらうことで、彼らの持つ高い専門性に社会性を付与して、付加価値を高めようというのが狙いです。私の役割は、彼らの相談相手として、企業人としての経験を踏まえて助言を行うことです。この仕事を通じて、何人かのPDが新しい道を歩みだすのに多少のお手伝いできたことは、大きな喜びとなっています。



### 川名 房吉さん（第4期生2011年度本科修了）

#### 「優しい社会」

私は館山市の33軒の集落で、農業をやりながら副区長をしています。

田んぼを作り、田園風景を守ってきた先輩たちが高齢となり、サポートしてあげる場面が増えてきました。

また、知的障害者施設で週2日ほど、障がいをもった方々のお世話をしています。こちらも入所されている方や保護者が高齢となり、新たな問題が発生しています。障がいのある人やその家族の幸せを考える優しい社会であることを望んでいます。RSSCで地域社会と福祉に関して学んだことを実際の現場で実践し、少しでも社会のお役に立てればと考えています。



### 文 妹慈さん（第2期生2009年度本科修了）

#### 「お年寄りの会」

子育ての時期には親子会、親たちの会、最近はお年寄りの会など、私は、地域の外国人やしょうがい者をはじめ、色々な人たちとともに、生活しやすい場所にするために様々な活動をしてきました。

現在も、私のまわりには、多くの世代の人たちが集まっています。そんな彼らの要望や願いを実現させるため、何ができるのかを考えながら行動に移しています。これからもRSSCで出会った先生方や皆さんとの交流から学んだことを生かしていきたいと思っています。



### 溝渕 和代さん（第4期生2012年専攻科在籍中）

#### “Les Amis de la Chanson”

私が歌を習い始めたのは20年前。12年前に歌仲間が集まって「お互い切磋琢磨して少しでもいい歌が歌えるようになりたい」と「レザミドウラシャンソン（歌の仲間達）」という会を立ち上げ、企画を担当。会場を武蔵野の大きなホールに移したのが8年前。震災後は無料の「復興支援チャリティー」に。今年はRSSCの大勢の友人たちの応援で、「シニアの活動として楽しく生きる勇気もらった」などのお言葉を頂き、単なる趣味から社会的位置づけのある活動との認識を新たにしました。これからも楽しみながら歌い、企画を続けて行きたいと思っています。



### 佐々木恵子さん（第3期生2011年度専攻科修了）

#### 「失語症会話支援」

RSSCの2年間は勤労学生でした。修了後は大学に充てていた時間を「失語症会話パートナー」と「調布若葉ケアセンター」でのボランティアに使っています。

失語症とは事故や脳血管障害などの後遺症によって左脳の、言葉を司る能力に障害が残った状態を言います。失語症になるとそれまでの全ての社会生活から疎外され、孤立した生活を送ることになる方が多くいます。「パートナー」の仕事の一つは「会話サロン」でそんな方達のお喋りのお手伝いです。「ケアセンター」ではお年寄りの話し相手が主な仕事です。失語症の方、高齢の方、本当に大きな経験をなさった方達とのお話しは、私を豊かにしてくれます。

（会話パートナーは養成講座があります。興味のある方、乞うご連絡）



### 小川 潔さん（第5期生2012年度本科生在籍中）

#### 「生きがい創造の研究」

RSSCサポートセンター登録「セカンドステージの生きがい創造研究会Ⅱ」では、在学中はもとより修了後の社会との交流や社会に役に立つ活動について、その意義と背景を理論的に学び、ワークショップで意見を交換し、勇気ある第一歩を踏み出すための相互啓発を図っています。会員は、「自分を活かす分野を探す」「身の回りでできることから始める」「ボランティア活動へ参加する」「コミュニティ参加の心得」等、自分が納得するまで時間を掛けて学び、そして、『マズローの欲求段階説』のように、喜びと生きがいを求めて一步一步階段を上って行く努力を続けています。

（研究会Ⅱ代表）



## 講演会の紹介

### 公開講演会

### 『女縁・男縁・選択縁—孤立・無縁・無援を超えて』

立教大学のホームカミングデーで賑わう10月21日(日)、立教セカンドステージ大学上野千鶴子客員教授の講演が、『女縁・男縁・選択縁—孤立・無縁・無援を超えて』の演題で開催されました。聴衆はRSSCの受講生・修了生、大学校友・学部学生等約140名。多くの上野先生ファン、半数近くの男性諸氏も熱心に聞き入りました。

内容は、高齢化社会での「おひとりさま」の生き方について、時折ユーモアを交えての独特の上野節に大きな笑いが起こりました。特に私たちに関係の深い印象的なひとコマをご紹介しますと、コミュニティ参入のマナーとして「女縁の七戒」「男縁の七戒」のお話のくだりで、一言ひとことに納得してうなずく姿が見られました。

「女縁の七戒」とは、①夫の職業を言わない、②子供のこと

を自慢しない、③自分の学歴を言わない、④お互いに奥さんと呼ばない、⑤お金の貸し借りをしない、⑥女縁を金儲けにしない、⑦相手の内情に深入りしない。「男縁の七戒」とは、①前歴は言わない、②家族の話はしない、③学歴を言わない、④お金の貸し借りはしない、⑤お互いに先生や役職名では呼ばない、⑥上からの視線は不可。仕切屋にならない、⑦特技やノウハウはニーズがマッチングした時だけ。この他に沢山の示唆に富む貴重なお話があり非常に参考になる楽しい講演でした。日頃男性諸氏に辛口な上野先生とは思えない優しい語り笑顔に驚いたと、シニア男性の声も会場から聞かれました。



### 公開講演会

### 『学び直しと再チャレンジ～音楽への情熱尽きることなく』

11月9日(金)の18:30から、芸術の秋に相応しく世界的なピアニストである館野泉氏をお迎えし、コンサートと座談会の夕べがRSSC主催で開催されました。受講生・修了生はじめ市民を含む音楽愛好家約140名がなごやかな雰囲気の中、バッハの「シャコンヌ」、coba作曲「記憶樹」他2曲の感動的な演奏とウィットに富んだ座談に潤いと励ましをいただいた一時でした。立教大学でのプロによるピアノ演奏会は近年初めてと伺いました。



「館野泉氏は、独創的なピアニズムにより世界的に評価の高いピアニストであるが、2002年演奏中に病に倒れ、その後リハビリに励むも、音楽家として再起不能と目されるにいたった。だが、氏は不屈の努力と工夫により、左手のピアニストとして奇跡的に復活する。このように自身の負の条件を正の

条件へと読み替え、芸術家として新たな境地を開かれました」(千石英世先生文)

座談を挟んでの2回の演奏では、美しく時には力強く時には情熱的な音色に、左手だけで弾かれているとは微塵も感じませんでした。まさに左手に全身全霊を託した芸術的な演奏にぐいぐいと引き込まれました。惜しむらくは一昔前の古いピアノであったため、演奏に相当ご苦労された感があり、それでも「私は楽器にはこだわらない!」と言われ救われた思いがしました。

座談会では、音楽評論家の青澤隆明氏と千石先生が加わり、左手のコンサート復活のエピソード、演奏家の心理・情念、ピアニストにとっての楽器、左手の為の演奏曲が増えてきたこと、演奏家が受ける会場からのエネルギー(今日は良かった!)など、非常に興味深いお話に、笑いあり涙ありのあっという間の時間でした。

### 『持続可能性(持続可能な社会)について考える』

RSSCの「生きがい創造研究会」「同 創造研究会Ⅱ」は、コラボレーションで、10月23日(火)立教大学社会学部阿部治教授の『持続可能性(持続可能な社会)について考える』の特別講演会を開催しました。両研究会を中心に約50名、第1～3期の修了生約20名と予想以上の参加者となりました。

最初に、1992年にリオデジャネイロの環境サミットで、カナダの12歳の少女セバン・C・スズキさん(Severn Cullis-Suzuki)が世界を変えたスピーチ「I challenge you, please make your actions reflect your words.」「(大人は私達を愛していると云いますが)その言葉が本当ならば、どうか行動で示してください」がビデオで紹介され感動を覚えました。

講義のいくつかのポイントを紹介します。今まで国際的課題は環境・開発・資源・エネルギー・人口・食料・貧困などは別々の問題と思われてきたが、これらは全てつながっているので、

統合して地球環境問題として考えるのが大切であること。今世紀最大の二つの環境問題は、気候の変動と生物の多様性(biodiversity)であり、これからは循環型社会・低炭素社会・自然共生社会が求められること。経済は環境と社会の安寧のための手段であり、経済も環境に支えられて成り立っていることなど。

最後の「自然があるから人間は生かされている。里山の自然の良さは都会では分らない」の言葉に自然環境の大切さについて実感しました。そして、私たちは身の回りで何をすべきなのかを考え、出来ることから着実に実行することが大きな社会貢献に繋がると感じました。



### 公開講演会

### 『日本の再生』

2012年12月15日(土)に、著名なジャーナリストで元立教セカンドステージ大学客員教授の立花隆氏による『日本の再生』の公開講演会が、立教セカンドステージ大学主催で開催

されました。発行スケジュール上、記事はご紹介出来ませんでした。

# RSSCサポートセンター活動紹介

立教セカンドステージ大学では、受講生が在学中或いは修了後に、社会との交流や社会貢献の研究・実践を行うグループを支援する組織として、「RSSCサポートセンター」を設置しています。現在8つのグループ（会員総数190名）が登録して、社会的にも意義ある研究・実践活動を熱心に展開し、毎年研究発表会を開催しています。その成果は学外にも発信して注目されています。

\*新設の「立教異世代交流倶楽部」「人財リエゾン」は次のページに掲載しました。

## アジアの貧困とNPO/NGO支援研究会

バングラデシュを始めとするアジア諸国の貧困の現状について研究し、対外活動や現地訪問を実施。アジアのNPO/NGOの支援活動に参加。9年度～12年度とホームカミングデーのバザー収益金を、バングラデシュの知的ハンディを持つ子供の施設ラルシュマイメイン「ごはん基金」に献金。



## ウクレレ合唱団「鈴懸」

「介護と看取り」の授業を受けて仲間でウクレレ合唱団を創設。初心者を集めてラウンジなどで練習し、高齢者施設等で訪問演奏会を開催して、社会貢献に資する。毎月2回（水曜日の夕刻）ラウンジにて練習会。夏季合宿を開催。

10年度・11年度・12年度と数件の高齢者施設訪問実施。



## 日本に住む外国人を考える会

日本に居住している外国人の歴史・生活実態・文化実情を知り、共に生きるために何が求められ、どのような行動が必要なのかを調査研究し実践する。対外的に情報を発信し、研究会開催、講演会参加、各種資料館の訪問など。11年度報告書「ともに生きる」1号作成・配布。



## かがやきライフ研究会

自らデザインする生き方を広く多くの人々に知ってもらい、多くの人々が“かがやくライフ”を送るためのエッセイ集「すずかけの小径」を毎年1回発行（有償）し、RSSC内外に情報発信する。毎年エッセイ集の発行。RSSC内外に500部頒布。現在第4号編集



## 都会・癒し・自然 交流研究会

都会生活者が積極的に自然との共生、農山漁村での生活を通し、心身ともに健康になり、都会生活の質の豊かさの向上を目指し、各種情報発信を行う。沼津市戸田の田植え・ミカン採り手伝い。ホームカミングデーに戸田の物産展を開催。11年度・12年度は豊島区緑化活動参加。



## セカンドステージの生きがい創造研究会

第4期生中心。セカンドステージの生きがい創造を、多面的・多角的に調査研究する。その上で会員個人個人が自ら生きがいを持って社会との交流等に役に立つ活動を目指す。ほぼ毎月1回定期的に開催。外部講演者を招聘しての講演、会員の個人研究・体験発表。

## セカンドステージの生きがい創造研究会Ⅱ

第4期生中心の生きがい創造研究会の参加者が43名と多く、ワークショップの運営が難しいことから、第5期生中心の研究会Ⅱを登録し、活動趣旨は概ね4期生中心と同じ。毎月2回開催し、講義とワークショップを取入れる。4期生とのコラボレーションの講演会等も企画。

### 【☆11月27日発表会開催】

恒例の年次研究活動の発表会が開催されました。今回の発表は6つの研究会で、それぞれ会の代表者が発表し、今年度入学の第5期生の入会勧誘の場でもありました。パワーポイントを使ったり、会報を閲覧したりと、非常に臨場感あふれる内容でした。（サポートセンター記）

☆「立教異世代交流倶楽部」

立教セカンドステージ大学の受講生・修了生と学部学生の異世代が、同じ「今」を生きるものとして自由に意見の交換を行い、相互に理解し合う場として「立教異世代交流倶楽部」をこのたび設立しました。私たち個々人の多様なキャリアや社会経験がこれから社会に飛び立つ学部学生の一助になれば、そして若い人たちの夢や希望、新しい発想が私達の学び直しの刺激になればと考えています。



月1～2回程度の交流会を開催し、同倶楽部メンバーが学部学生と共有したいテーマを提案し、受講生と学生が話し合いながら決めます。テーマ例として、「芸術、文化を語る」「読書輪読会」「受講生が仕事を語る」「学生と受講生が今を語る」など。交流は参加する学生と円卓方式で意見の交換や感想などの発表を行います。

☆「RSSC人財リエゾン」の設置

RSSCの受講生・修了生には、豊富な経験・知識、特技、資格を有する、人財の宝庫と言っても過言ではありません。RSSCに蔵されるこのような人財の有効活用の具現化のため、現行サポートセンターに「人財リエゾン」(liaison：情報連絡・連携のオフィス機能)を設置し、希望する人財の登録・組織化を図り、自主的な研究会の開催、NPO・NGOへの人財の紹介等を含め、広くRSSC内外との交流、および社会貢献に資することを目的とします。例えば経験・知識別グループ、特技・資格別グループ、業種別グループの編成等々、それぞれのグループの特色を生かした研究活動や対外活動を行います。

(サポートセンター記)

☆ホームカミングデー・バザー開催

10月21日(日)の立教大学校友会主催のホームカミングデーに、3年連続でバザーを出店しました。実行委員会は「RSSC同窓会」と同窓会の「ウイメンズクラブ」、そしてサポートとセンターの「アジアの貧困とNPO/NGO支援研究会」で構成され、また、物品は、第5期生ゼミ長委員会の支援で、本科生・専攻科生にも声を掛けさせていただきました。



当日は、一等地のテントで実行委員の男女がエプロン姿に変身し、掛け声高く大勢の大学校友の方々にもお買い求めいただきました。特に、東日本大震災の支援のため、三陸名産の生わかめや地元の皆さんの手作りの小物なども展示販売しました。今年度の収益金は、「あしなが育英会 東北支部」と、バングラデシュ知的障がいのある子どもたちのための基金へ寄附をすることにしました。(実行委員会記)

☆「ニューズレターはRSSCのオピニオンリーダー」

教員 笠原清志

RSSCは、日本でもユニークな生涯学習のモデルとして社会的に大きな注目を集めており、その普及促進のためにRSSCの理念の具現化である、受講生の「真摯な学び」と「楽しく有意義なキャンパスライフ」の実際の生きた記録を、ニューズレターとして毎年2回各3千部発行する意義は極めて高いと思います。その観点から、ニューズレターは、広く社会へ発信する最大のマス媒体としての効用は非常に大きいものがあります。一方、この貴重な記録は、受講生の学びの「証」「備忘録」に留まらず、後輩への文化・伝統の伝達手段としての役割も担っています。



第1号から第10号までそれぞれのニューズレター委員会の皆さんが、与えられた紙面の中で創意工夫を凝らし、少しでも特色を出そうとする感性と努力に敬意を表します。こうした地道な積み重ねがニューズレター10号目を迎えた訳ですが、ニューズレターがRSSCのオピニオンリーダーとしてますます重要な役割を果たし、更に、20号・30号に向かって、連綿として続くことを願って止みません。(立教セカンドステージ大学運営委員)

☆編集後記☆

“伝統・文化の継承”と“進化”をそっと心に刻み、白熱した議論を交わした「ニューズレター10号委員会」。関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。

通学した日々の“様々な想い”を委員会メンバーが川柳に表現してみました。

年の瀬に ツリーにメサイア 感無量(N)

- 池袋 降りれば心は 18歳
- 通学路 共に学ぼう! 四世代
- キャンパスの 蔭にからまる 我が人生
- プラタナス 枯葉踏み踏み 恋蘇る
- 全カ力で 小さい文字に四苦八苦
- シニア生 最前列を 奪い合い
- ご褒美に 全カリレポート Sもらい
- 図書館で 先生ですかと カウンター
- 偏差値は どのくらいかと 子供訊く
- 髪染と サプリメントで 若造り
- ジェンダーを 学んでわかる 家庭不和
- ゼミの後 ジジババ集い 合コンへ
- クリスマス ジングルベルで 編集“完”



《ニューズレター No10編集委員》(五十音順)

青木剛夫 有吉一夫 宇佐美貴 大塚友子 大森光男  
川島純一 川瀬厚一 川村肇 音郷恵 柴坂總七 菅原輝美  
中村昌子 後田幸信 林かおる 平田育夫 増田竹夫  
安田善英 山岡やよい 吉澤健春 吉田君男